

## 石井 忠<sup>1</sup>: 玄界沿岸に漂着した丸木舟 Tadashi ISHII<sup>1</sup>: Wrecked canoe drifted ashore on the Genkai coast

福岡県遠賀郡芦屋町の海岸に丸木舟が漂着したという(石井 1992) ことを、芦屋の鈴木長敏氏から聞き、芦屋、岡垣を歩く度に海岸近くの住人に尋ね回っていたら、1982年同郡岡垣の久世という料亭の生簀にあることを突きとめた。久世を訪ねると、屋外に生簀の水槽があり、その横に立てかけるような状態で丸木舟が置かれていた。久世の小役丸卯太郎氏(1922~2000 78歳)は、地元で料亭や生魚料理など手広く行われている事業家であった。岡垣海岸(図1)を歩いていての発見で、氏は「丸木舟は、春先で汐入川のところに浮いているような状態で、半分ぐらいに水や砂が入っていました。よく見ると舟虫みたいなのが喰っていますが、一本の木を刳り抜いた丸木舟で、これは日本の舟じゃないと車で運びました。上の部といいますか舷のところの一部ない以外は実に立派なもんです」と語っている。

丸木舟はクリブネとかマルダブネとか称されるが、一本の丸太を刳り抜いたものを言うが出口(2001)によれば、いちがいにそれだけではないという。刳り抜き部材を前後につないだり、左右につないだり、刳り舟の両側に舟板(タナ)を継ぎ足したり、彫った舷側に舟底板(シキ)を組み合わせたりと、さまざまに複材化したものがあり、それらを総称して丸木船というところえかたをしている。

岡垣に漂着した丸木舟を少し観察してみると、清水(1975)の分類に従えば鯉節形であろうか。全長4 m65 cm, 最大幅62 cm, 高さ最大30-40 cm, 断面は舟首、舟尾がV字形をし、中央部はU字形となっている(図2)。横から見るとなかなかスマートな舟形をしている。内部は、小さなフナクイムシの孔に覆われている。

出口(2001)の丸木舟の分類で「シキとタナの発達からとらえた刳り舟の横断面分類」では、Oの完全な刳り抜きでなく、舷があったので、Aの段階である。舷は漂流中か漂着後に外れたか失われている。それを示すものとして、舷は木釘で止められた痕跡が残っている。残っている数は、右舷21本、左舷21本で左舷側が67 cmの位置で一部破損しているが左舷側は、破損の分、数は多くなるであろう。全部で42本残っている。木釘は2本並んでうたれたところが4ヵ所20 cm間隔ある。

内部に鉄釘のあとの錆があり、舟首から見ると左側に長さ約66 cmの亀裂があるので、それをふせたようなあとが残っているし、そこに釘錆が集中している。

内部は左右に向かい合う3個、計6個の差し渡しを受入れる刳り残しの突起があり、また、中央から舟尾側に、66 cmに幅37-40 cmの前者の2個より広い差し渡しがある。その中央に3×4 cmのくりこみがあり、帆柱をたてる柱受状のものが見られる。巨大なラワン材を刳り抜いてこの丸

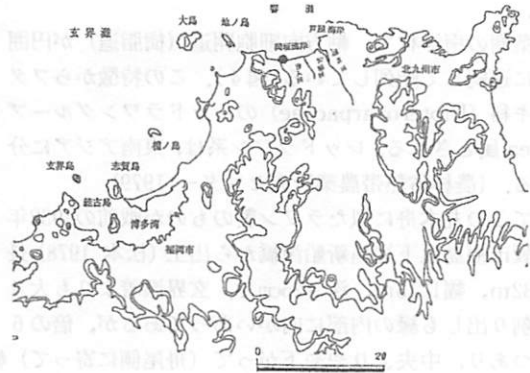


図1. 丸木舟が漂着した岡垣海岸の位置。

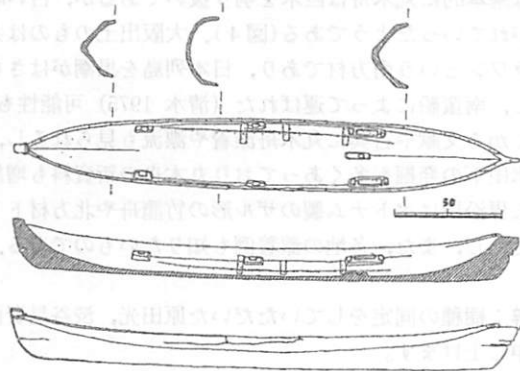


図2. 漂着した丸木舟図。

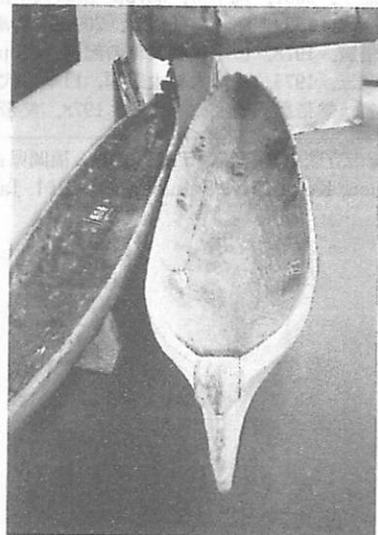


図3. 漂着した丸木舟。

木舟はつくられている(図3)。

樹種は愛媛大学原田光教授に依頼して、農学部森林資源講座の渋谷昌資先生が鑑定された結果は次のとおりである。

広葉樹の南洋材で、軸方向細胞間道(樹脂道)が円周方向に連続して配列している(図4)。この特徴からフタバガキ科(Dipterocarpaceae)のレッドラワングループ Shorea 属とされる。レッドラワン系は、東南アジアに分布する。(農林省熱帯農業研究センター 1979)

さてこの丸木舟に似たラワン製のものが戦前の1932年に大阪市福島区下福島新船津橋から出土(松本 1978)長さ6.32m、幅1.13m、深さ25cmで、玄界漂着よりも大きい。削り出しも縁の内部に向かいあってあるが、倍の6個ずつあり、中央よりやや下がって(舟尾側に寄って)帆柱をたてる柱受けがある。これを柱受けにするかについては異論があるようである。

ほかに日本でのラワン製の丸木舟の出土は東京大学人類学教室に断片がある(松本 1978)という。東南アジアでは基本的に丸木舟は巨木を削り抜いてあるが、古い時代から今日まで大きな変化がなく連綿と同じ形が受け継がれていったようである(図4)。大阪出土のものは共伴した遺物がなく、時代を特定することができないが、ラワンという南方材であり、日本列島を黒潮がはさむようにして流れているので、流れ着いたとも考えられるし、南蛮船によって運ばれた(清水 1975)可能性もある。

古くから文献や古典に丸木舟漂着や漂流も見られるし、再度そのような記録の検討も必要であろう。また各地で水田下の発掘も多くあっており丸木舟の新資料も増加している。また、ここで報告した丸木舟や1996年の夏に玄界沿岸にベトナム製のザル形の竹籠舟や北方材トドマツの丸木舟未製品の漂着もあり、これもいずれ報告したいし、また、各地の漂着例も知りたいものである。

謝 辞：樹種の同定をしていただいた原田光、渋谷昌資両先生、舟の実測をした甲斐孝司、伊藤あや子両氏にお礼申し上げます。

引用文献

出口晶子. 2001. 丸木舟. 307pp. 法政大学出版, 東京.  
 石井 忠. 1992. 海辺の民俗学. 209pp. 新潮社, 東京.  
 松本信廣. 1978. 日本民族文化の起源. 410pp. 講談社, 東京.  
 清水潤三. 1975. 舟. 大林太郎編, 日本古代の船. 269pp. 社会思想社, 東京.  
 農林省. 熱帯農業研究センター. 1978. 熱帯の有用樹種. 666pp. 熱帯林業協会, 東京.

<sup>1</sup> 古賀市立歴史資料館 〒811-3103 福岡県古賀市中央2丁目13番1号 <sup>1</sup>Koga City Historical Date Hall, 2-13-1, Chuou, Koga City, Fukuoka 811-3101, Japan

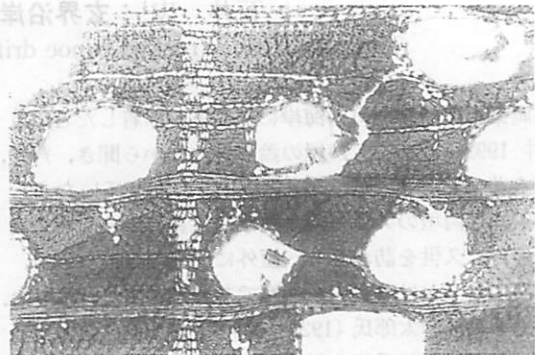


図4. 丸木舟木口面. 軸方向細胞間道(樹脂道)円周方向に連続して配列 Shorea 属の特徴.



丸木舟の内部構造